

中長期目標 (学校ビジョン)		夢や希望に向かい 自分らしく輝いて たくましく生きる力を育む			今年度の 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の生活や可能性を広げる多様な学びの開発 個々のニーズに応じたキャリア教育の充実 安全・安心な教育活動の追求。教育環境の整備 教職員の指導力・専門性向上 地域連携の強化 校内組織力の強化と業務改善 	《キーワード》「前進」	
年 度 当 初					(1)月			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
各学部の取組	小学部	○キャリア教育の「小学部でつけておきたい力」を意識した授業づくり	○障がいの程度が様々であり細かなケアや観察が必要である。 ○日々の生活や卒業後の生活について心配に感じている保護者も多く、情報提供したりするなどの関係づくりが重要となっている。 ○キャリア教育の視点で付けたい力と授業のねらいとのつながりについて、教職員だけでなく保護者とも情報を共有していく必要がある。 ○授業の充実については、学部の勉強会やグループ学習などで、他クラスの実践を知る機会を設けている。	・担任や学校がキャリア教育の「小学部でつけておきたい力」の視点で授業等のねらいについて保護者へ説明したり、福祉や進路に関する情報提供を行ったりして、保護者の7割以上が、知りたい情報を得ることができたと感じている。	・福祉や進路に関する情報について保護者のニーズを細かに聞き取り、適宜情報提供する。 ・クラスの実践を報告する勉強会を継続する。 ・機会を捉えながら他クラスに入って実践を参観できる場面を設定する。 ・他クラスの実践を参考にできるよう、廊下掲示や学級通信、学部通信などの掲示方法や通信の保管方法を工夫する。 ・学部主事や副学部主事、キャリア教育部が、学部会や勉強会で実践や事例をキャリア教育の視点で整理して紹介し、情報を共有できるようにする。	・学部通信や学部懇談で進路に関する話題を交えて話し、進路について考えるきっかけを積極的に作った。また、保護者に進路に関して知りたいことを尋ねるアンケートを実施し、5家庭から回答があった。学部通信で基本情報の掲載されている冊子や事業所情報をまとめたファイルがあること等の情報を提供した。 ・他クラスの授業を実際に見合うことは難しかったが、各クラスの実践や使用している教材、教室環境を紹介し合う勉強会や、事例を交えた進路・キャリア研修会を開催し、職員間で情報を共有したり、キャリア教育について考える機会を設定したりした。	B	・懇談や参観日などで、継続して保護者に進路やキャリア教育に関する例や情報を提供していく。 ・教育支援計画のニーズを保護者が考える際に、担任と意見交換をしっかりとしながら作成していくようにする。
	中学部	○自己実現に向けて、一人一人の実態や課題に応じた授業づくり	○正確な実態把握を行うためには、生徒を見取る力を高める必要がある。また、授業力向上のために、効果的なICT活用や教材・支援、授業展開の工夫などに継続して取り組む必要がある。 ○進路学習について、様々な状況に応じて学習内容を考え、計画的に実施することが必要である。また、生徒や保護者のニーズを聞き取り情報提供を行うことが必要である。	・職員、生徒の8割以上が、生徒自身で時間を意識し、自分で行動できることが増えたと感じている。(単一) ・職員、保護者の7割以上が、生徒の実態や生活年齢に応じた学習や適切な集団学習の工夫ができたと感じている。(重複)	・生徒を見取る力につながる学部研修を行う。また、定期的に単一会や重複会を実施し、複数の教師間で頻繁に生徒の情報交換を行い、生徒の実態把握や授業の充実にも努める。 ・時間通りに授業を開始する意識を徹底し、事前準備や生徒への声かけに努める。 ・生徒一人一人の病気や障がいに応じた適切な支援を行うために、保護者・関係機関との連携を深める。また、進路指導主事と連携して、個々の実態を踏まえた進路学習(合同、個別)を計画し、実施する。	・生徒に時間を守って生活するという意識が定着し、教師の声かけがなくても行動できることが増えてきた。3年生は自分たちの進路や将来をイメージし、今すべきことを考えることが増えた。1, 2年生が、将来のイメージをもてるように指導していくことが課題である。(単一) ・「鳥取」「季節」等をテーマにした学習を行った。担任以外の教師とも一緒に活動でき、自ら意欲的に教材へ関わろうとする姿が増えた。しかし、重複会では、授業内容の確認はできたが、指導の充実につながる話し合いは不十分であった。(重複) ・短時間の学部研修を計を計7回実施した。学部外からの参加者もあり、概ね好評であった。	B	・単一会や重複会の持ち方、運営の仕方などを検討し、共通理解だけでなく、実態に応じた教材設定や指導の充実、適切な評価につながるようにする。 ・実践につながる学部研修を計画的に行っていく。
	高等部	○生徒のキャリア発達に即した授業づくり	○現在できていることを継続しながら、生徒の変容に着目した授業改善の評価をし、さらなる改善に努めることが必要である。	○キャリア発達の見点で授業・体験活動等の工夫・改善を行い、生徒の学びを促進しようとしている。	・キャリア発達、生徒一人一人のキャリア教育目標について共通理解をする機会を設ける。 ・単一会、重複会や子どもを語る会等で情報交換を行い、生徒の実態把握や授業の充実(教材の工夫や体験・集団活動の工夫・ICTの活用)に務める。	・教員の意見を取り入れた勉強会を実施した。(学部全体2回、単一会3回、重複会3回)今年度は特に自立活動と授業づくりについて学んだ。運営方法等に課題が残ったが、勉強会の必要性が高まってきている。 ・副主事、学習チーフが声を出して情報・意見交換をする様子が多く見られた。 ・年間を通して交流や体験活動を多く実施できた。 ・掲示板(学部連絡)を活用することで、全体の情報共有に努めた。 ・生徒の実態把握や授業の工夫、充実に向かう体制ができてきた。	B	勉強会の時間の確保。また、主事、副主事が中心となってニーズを把握し、勉強会を計画する。(全体、単一、重複会の勉強会との連携。専門性の高い職員に講師を依頼する。必要な研修(キャリア教育、自立活動、授業づくりは毎年計画的に行う)。 ・情報共有や授業づくりの工夫など、今年度の取り組みを継続して意識を高めつつ、動画による授業研修や他校の授業研修に参加する等、学部全体でスキルアップしチーム力を高める。 ・来年度必要な研修について、今年度中に検討しておく。(来年度の生徒の実態、行事や学習内容に見通しを持つ。)
一人一人の生活や可能性を広げる多様な学びの開発	教務部	・年間計画の見直し、運用 ・個の学びをつなぐ授業づくり	○昨年度のまなびのプロジェクト、教務部会の中で、個別的教育支援計画等の様式改訂にむけて協議し、素案を作成した。運用、手順等については検討が必要である。 ○個の学びをつなぐ個別の指導計画と年間指導計画等について検討が必要である。	・個別的教育支援計画等の様式が改善され、個の学びをつなぐ作成物が整理され、次年度にむけて運用している。	・まなびのプロジェクトと連携し、現在の様式についての課題を洗い出し、年間計画の中に位置づけながら、計画的に取り組む内容について関係の分掌と検討、整理していく。 ・諸計画の見直しの必要性や改訂の方向性について研修をしたり、作成の手順について共通理解したりする機会を持つ。	・職員からの意見を取り入れながら、個別的教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画の新様式を作成し、運用が始まっている。 ・個の学びをつなぐために、個別の指導計画、年間指導計画との関連を図り、整理した。重複学級における学習指導要領の目標・内容の一覧の活用など、個の学びを引き継いでいく方法についても検討し、提案した。来年度からの活用に向けて準備を進めている。	A	・新様式にした意図や作成手順について共通理解を図っていく。 ・目標設定、評価等の研修を行いながら、今後もよりよいものとなるよう改善を図っていく。
	まなびのプロジェクト		○児童生徒の個々の学びをつなげるための具体的な取り組みについて、個々の分掌だけでなく、学校全体で課題を共有し、取り組む必要がある。	・学校経営方針の重点事項について、半数程度の項目で改善がみられる。	・進捗状況については、適宜掲示板等で全職員に見えるようにしていく。	・様式の見直し等については次年度実施に向けて形が決まってきた。他の業務についても次年度に向けてそれぞれの立場でできることについて継続して検討中。	B	・学びのプロジェクトが効果的に機能するように次年度の学びのプロジェクト自体の実施方法等について検討する。 ・裁量予算については、予算内示後に、次年度の事業について具体的な方針を検討する。
	教育企画部	多様な学び(行事等)の工夫	○作品展やわくわくフェスタ等について、新型コロナ感染症の影響で、例年とは違った形での運営がなされ、職員も保護者も行事の実施に見通しが持ちにくい状況であった。 ○図書館の運営についても、同様に学級単位の利用を基本とするところであったが、図書館利用のルールについては職員への共通理解が不十分なところがあった。	・わくわくフェスタや作品展等の実施した際の児童生徒の満足度が7割以上ある。	・わくわくフェスタは、複数の実施形態を検討の上、形態決定する時期を定め、職員、保護者に事前に周知する。実施については、最大限多くの保護者や児童生徒が参加できる形態を検討する。 ・作品展については、WEBを活用し、新型コロナ感染症の影響を受けにくい形で実施する。 ・図書館の運営については年度当初の職員会や掲示板等を活用して、利用のルールを周知する。	・わくわくフェスタや作品展等についてアンケートをもとに、振り返りを実施。児童生徒からも改善に向けた意見が出された。 ・WEB等を利用して、新型コロナ感染症流行下の中で最大限できることを考えながら、各業務を進めることができた。 ・図書の出貸期間についての利用ルールは、個別に声をかけることで対応した。	B	・わくわくフェスタについては、児童生徒の意見の取り入れ方や会場調整について検討し、次年度に引き継ぐ。 ・各業務について、次年度もWEB等の活用を選択肢に入れておく。 ・図書館のルールの掲示方法について、児童生徒に分かりやすい方法を検討し、次年度に引き継ぐ。
情報教育部	ICT機器を活用した学習指導の工夫	○ICT機器が整備されており、視線入力装置に関しては、利用のニーズも高い。その他のICT機器や、iPadのアプリなどについては、使用頻度、使用状況が職員間でかたよりがある。	・ICT機器やアプリの利便性、実用性が広まり職員がICT機器を活用している(新しい使い方をしている) ・ICT機器を活用した授業を8割以上の教員ができる。(評価基準を示したアンケート用紙を年度末に配布する。)	・ICT機器の活用事例を教職員共有の掲示板にあげ、共有する。 ・ICT機器が活用しやすい環境整備と支援体制に努める。 ・ICTサポート支援事業との連携を密にし、活用する。	・全体研修や学部での研修、個別の相談、ICT支援員との連携をとって、ICTの活用の機会が増えている。ほぼ全員の教員が授業においてなんらかの形でICT機器を活用している。	A	・ICT機器の技術は、日進月歩で進化している。使い方の幅を広げていくように、研修の設定、情報の共有を引き続き行っていく。	

個々のキャリア教育の実践	キャリア教育	・キャリア教育の推進	○コロナウイルス感染症に対応した職場体験・施設利用体験の実施方法を検討し、準備を進める必要がある。 ○本校のキャリア教育の基本的な考え方について全職員で理解するために、各学部で教職員研修を行っている。 ○進路説明会や進路座談会を持ち、保護者へ進路に関する情報提供を実施している。	・進路の流れやキャリア教育・人権教育の基本的な考え方について教職員で共通理解し、実態に応じた目標を意識して指導をしている。 ・卒業生の情報、福祉サービスの状況等、進路・キャリア教育に関する情報発信に努め、必要な情報を保護者や生徒に還元している。	・校内研修(全体、学部等)を2回以上計画し、進路、キャリア教育、人権教育について教職員の共通理解を深める。 ・教職員、保護者への情報提供の方法を整理し、外部機関や支援部と連携して該当生徒と保護者へ必要な情報が正確に伝わるよう工夫する。	・進路座談会、施設利用体験、職場体験、職場見学など、卒業後につながる情報提供や体験を多く実施した。 ・生徒、教職員、保護者に必要な情報が伝わるよう、資料の提供、掲示板の活用や説明会の実施など工夫をこらした。また、不参加者へのDVDの貸出などきめ細かいフォローも行った。	A	・生徒・保護者のニーズをくみ取り、個別に対応している。 ・卒業後にむけて必要な情報を提供したり、情報交換や研修会の場を設定する。 ・学部会等で進路や人権に関わる情報提供を積極的にを行い、進捗状況を共有する。
	保健安全部	○児童生徒が安全に快適に学校生活を送ることができる環境整備と体制づくり	○ヒヤリハット事例を掲示板で迅速に報告したり、学部会で注意勧告したりしたことにより、教職員の危機管理意識が高まった。 ○安全で健康的な学校生活を送ることができるように、救急ウィークで課題を取り上げたり、感染予防対策についての周知徹底を行っていくことが必要である。 ○昨年度も新型コロナ感染予防の為、全校一斉での訓練ができなかったため、一時避難、児童生徒の心のケア等の対応は十分ではなく、安全な避難ができるように総務や各委員会、防災委員会等での十分な連携が必要である。	・個に応じた緊急救急体制が学級・学部・学校で共通理解され、危機管理意識を持ち、環境や体制が整備されている。 ・災害時の避難経路や場所、児童生徒の引き渡し等、救急体制が確立している。 ・防犯体制が確立されている。 ・教職員と看護師の双方がそれぞれの専門性を発揮して、児童生徒の成長・発達を最大限に促すことができている。	・学部会や掲示板活用でのヒヤリハット事例の取り上げを継続し、詳細を分析しながら事故防止の徹底を行う。 ・感染予防対策、研修や各種訓練、救急・防災ウィーク等での課題を取り上げたりして、安全面・健康面に留意した対応を行う。 ・防災対策については、総務部と連携を深め、業務分担しながら、災害に備えた環境を整えていく。 ・教職員と看護師が同じ目標に向かって支援できるよう、個人シートの内容や活用方法を検討する。 ・学部会への参加や学校生活の中で教職員と看護師がコミュニケーションを図り、積極的に情報交換を行う。	・ヒヤリハット事例の報告は、掲示板や学部会で行うことで、教職員の意識の向上にもつながっている。 ・各種訓練を計画的に実施することができた。新型コロナ感染症の状況により、学部や学習グループでの訓練になり全体の動き方がわかりにくかった。しかし、訓練の前に準備や打ち合わせや反省をしたり実施後に避難用具の見直しをしたりすることができた。 ・拡大大学校保健安全委員会では訓練の反省から出た課題や対策、防災体制の今後の方針を確認することができた。 ・ケアのある児童生徒の担任・学部主事と看護師が話し合い、双方の目標や方策を確認して支援できた。	B	・引き続きヒヤリハットの報告を掲示板や学部会で行い、教職員の危機管理意識を高められるようにする。また、0レベル事象の扱いの検討が必要である。 ・全体での避難訓練を行い、避難方法を全体で共有する。 ・防災に関しては、保健安全部で協議したことを防災委員会に報告し協議する。 ・外部講師を招いて防災に関する話を聞いて、児童生徒、教職員の意識を高める。
教職員の指導力専門性の向上	自立活動部	・研修の計画的な実施、授業力向上	・肢体不自由・病弱教育の基礎的な知識や実技について全職員で毎年確認するとともに、アンケートを参考に実践に結びつきやすいテーマをお役立ち勉強会等を活用して計画的に研修している。 ・経験年数や担当する児童・生徒の実態が異なるため、個々の専門性は様々である。基礎的な知識を押さえるとともに、身体面や認知面の指導等、職員の専門性向上を引き続き図る必要がある。また、教材・教具の活用の仕方等、職員間で情報を共有する機会が少ない。	・自立活動通信「MANABI」を8割以上の職員が読み、日々の実践に役立つ内容だと感じている。 ・主催した各種研修会の内容が、教職員にとって日々の授業実践に役立ち、専門性の向上につながったと感じている。(7割以上)	・「MANABI」に連載ミニコラムのページを作り、教材・教具に関する情報や身体面・認知面の指導につながるような情報を端的にイラストや写真等を交え、わかりやすく伝える。 ・「MANABI」の見どころを紹介する。 ・研修会後にアンケートを実施し、感想や要望をもとに次回研修へつなげていく。 ・15～30分以内の有志によるミニ研修を行い、自立活動に関する専門的な知識を教職員に紹介していくとともに、自立活動部員が研修を行うことで、専門性を高めていく。	・MANABIはアンケート結果を元に、職員が知りたい情報や実践に結びつく内容を取り上げたり、写真やイラストの挿入、目次の作成等、気軽に読めるような工夫をしたりすることで、一定数の読者数を維持することができた。 ・研修に参加した教職員だけでなく、講師やサポートとして参加した部員も専門性の向上に繋がった。研修に参加できなかった職員にもMANABIを通して自立活動目標設定シートの使い方や道具や遊具の紹介ができた。	B	・時間的な余裕がなく、読むことができないという意見もあったため、発行する時期や回数、提示の方法などは今後も検討が必要である。 ・研修内容の精選、時期、方法を検討するとともに、ミニ研修会を効果的に使いながら、指導力専門性の向上に引き続き努めたい。
	支援部	・校内支援の強化	○協力体制が十分でなく担任が悩み事を抱える傾向にあった。 ○対応が対蹠的であり、予防的な対応になっていなかった。 ○会議を開くことイコール問題解決にはなっていないかった。 ○SSWの活用について、単発の利用になっていた。	・相談が一次支援段階での問題解決がなされ、各種会議の開催が最低限に抑えられている。(前年度比で評価) ・SSWの定期的な来校とSSWが同席した保護者面談の件数が増加する。(前年度比評価)	・予防的な対応を実施していく。 ・課題の早期解決に向け校内支援主任や学部の校内支援担当が積極的に各クラスの担任とコミュニケーションをとる。 ・二次支援は支援会議やサポート会議等とし、実施の際には参加者の役割や目的等について事前に確認をする。 ・職員の指導支援の参考となる研修を短時間設ける。動画も活用し空いている時間に見ることができるようにする。 ・SSW、SC等の業務内容や活用について職員に周知し、適切なタイミングで担任等とつなげる。	・生徒指導担当等でミーティングを定期的に設定し、児童生徒の情報について共有する場を設け情報共有することができたが、予防的対応の必要性や方法を共通理解することが必要。 ・SSWとの連携件数は前期よりもさらに増加しており、多様な形での活用の方法も多様になってきているが、SCの活用がなかなか増えなかった。	B	・生徒指導担当等のミーティングに必要なに応じてSSW、SCが参加する機会を設け、多角的な視点で情報を分析できるようにしたり、学部で出てきた実際の問題について、予防的対応の視点で検討し、実践→評価をする等の機会を設けたりする。 ・SSWを活用し効果的であった事例や流れについて具体的に校内に周知する機会を設ける。 ・各学部ごとの児童生徒の状況把握と情報共有をより強めるとともに、SSWやSCの役割、活用場面を周知することで、効果的な活用につなげる。
地域連携の強化	総務部	・地域連携	○防災等、地域との連携を深める必要がある。	・学校運営協議会の中で防災体制等、地域との連携について議論され、問題点と課題に対する取り組みが職員間で共有されている。	・地域連携について学校運営協議会等で検討し、その内容について、職員に周知する。 ・解消が難しい課題については、複数年で取り組む計画を検討する。	第2回の運営協議会で江津地区との連携を進める意見をいただいた。課題はあがったが、職員への周知は不十分だった。来年度の活動のアイデアも出だしている。	B	周知方法の工夫が必要。また、避難した際の動きを実際に行ってみる必要がある。非常食の準備を進める。直接交流を実施したい。
	支援部	・センター的機能	・地域の学校の求めに応じて、リモートを活用しながら相談活動を行った。1回の教育相談をきっかけに複数回相談を継続したケースもあるが、単発で次につながらないケースもあった。 ・研修会の中に情報交換の場を設けることで、参加者が日頃の悩みや困り感を出し合い相談しているが、その後の教育相談にはつながりにくい。	・地域の学校のニーズに応じた教育相談、その後のフォローを行っている。	・東部の肢体不自由特別支援学級、東・中部の病弱・身体・虚弱特別支援学級のClassroomを作成してつながりを持ち、いつでも相談できる体制づくりをする。 ・ニーズに応じて教育相談を行い、その後のフォローを定期的に行う。	・研修会のたびに個別に話し合う機会を持つ中で、特別支援学級担任の困り感を把握したり、相談ののりたりする機会を設けたり、教育相談後のフォローを定期的に行うように努め、継続相談のケースが前年度に比べて増えた。	A	・年度の早い時期に、Classroomを利用して特別支援学級担任の顔合わせを行い、相談しやすい体制づくりを行う。 ・ニーズに応じて教育相談を行うなかで、課題解決に向けて定期的に相談の機会を設けたり、研修会の内容を工夫したりする。
校内組織力の強化と業務改善	総務部	・業務改善 担任の文書作成に関する業務を見直す。 教材教具の管理方法について見直す。	○担任は、様々な文書を作成することに多くの時間がかかっている。 ○教材教具のより利用しやすい管理方法を工夫する必要がある。	・文書作成に関する連絡や業務方法が改善された職員が60%が感じている。 ・教材教具の管理が改善された職員が60%が感じている。	・文書作成に関し、「作成の目的」「作成時期」「記入例」「保存・提出方法」を明確にし提案する。 ・文書データの保存フォルダを整理し、「とりせつ」にリンクする。 ・教材教具の保管先や貸し出しルールを明確にして職員に周知する。	・文書作成等の連絡については、以前に比べて丁寧に作成手順を伝えたり、ワードファイルを掲示板で参照できるようにしたりすることで、作成にかかる負担が軽減できている。 ・HP作成にかかる時間等のアンケートなど、業務の負担を具体的に調査した。 ・教材保存フォルダに保存された教材が増えた。 ・教材室が狭いため、教材の出し入れ、整理等が難しくなった。	B	職員連絡で使用するノーツ掲示板をさらに活用することを検討する。 教材室の管理・運用方法を検討する。
	事務部	業務改善・環境整備 倉庫・書庫等の整理整頓を行う。	○倉庫に経年劣化したものや破損したものが長年放置されている。 ○物品等が適切に管理されていない。	・倉庫等の整理整頓を行い管理しやすい環境にする。 ・その環境を維持する。	・倉庫等の整理整頓を行い不用物品は廃棄する。 ・倉庫の中に何を保管管理しているか分かるように表示する。 ・教職員に倉庫・物品の使い方を周知する。	・文書倉庫、事務室倉庫、事務室外倉庫、プレハブ外倉庫等と整理整頓を行うことができた。また、不用物品は廃棄することができた。 ・文書倉庫・事務室外倉については何が保管管理しているなどの表示ができた。 ・文書倉庫については使い方を知らせることができた。	A	・災害時用品の保管場所について検討する必要がある。

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し